

成瀬巳喜男のファンダメンタルズと疑問とその解明 (6)

5. 一つの区切りとしての成瀬巳喜男論

果たして、成瀬巳喜男は何を意識していたのかということです。いかに論評したところで、本人の言葉が遺っていればそれが真実のはずです。本人の発言はかなり遺っているようですが映画作りの核心を衝いた言葉を本人はどうも発していないような気がするのです。

「孤独」と「忍従」という成瀬巳喜男を表現するキーワードを提起したのは映画評論家の清水晶ですが、それに加えるキーワードとしては、「貧乏」であり「やるせなさ」（成瀬の名前をもじって「ヤルセナキオ」と呼ばれたこともありましたが）であり「いとおしさ」ではないかと感じます。このことに関しては、藤井仁子の言葉に集約されていると思いますので、そのまま取り上げることにします。曰く「成瀬巳喜男という一監督が撮影所の要請に応じて、そのシステムの枠内で仕事をしたに過ぎないことを認めても、なおその作品はこれほどまでに特異な輝きを放つわけである。成瀬の作品は、その抵抗の過程において単純なジェンダー概念に揺さぶりをかけるほどのものであるが、四方田犬彦によって授けられた『男性による女流』という称号は、そんな成瀬にふさわしいものだと言える。成瀬巳喜男が1968年という一つの画期をなす年以前にすべての作品を撮り終えていたことを思えば、これは驚嘆に値する事実ではなかろうか。だが、さらに驚くべきなのはこうしたあらゆる抵抗が、ふと目を伏せたり顔を曇らせたりといったごく日常的な身振りのみで構成されていることである。日本映画の隆盛から衰頹までをそっくり覆う成瀬巳喜男の歩みとは、そのような抵抗の記録であったのだ」

成瀬巳喜男は、昭和の時代の家庭のいざこざを（程度の差こそあれ）的確に描きました。個々人の身につまされた難題を大上段に振り上げることもなく、当然のここのようにごく自然に描いた人でした。また、藤井仁子が言うように、「抵抗の記録」だったのです。そのことが独自の日本的リアリズムであったのではないのでしょうか。成瀬巳喜男にとっては、「悩み」なんてものはゼイタクなものであり、「幸せ」なんてものはハイカラなものだという観念が根底にあり、本来は凶太い反逆者でありながら、それを他人の目に触れさせることもなく「孤独」と「忍従」の中で生きた人であり、これはまさに悲劇的であり宿命といった暗い影を感じるのです。そうした中で「不踰矩」であった成瀬巳喜男の実像は、失われた日本人の美学そのものではなかったのではないのでしょうか。失われたものだからこそ、「やるせなく」「いとおしく」感じるのです。ここで成瀬巳喜男を崇める必要も声高に喧伝する必要はまったくありません。その作品群と心置きなく対峙することこそが大切だと考えるのです。

佐藤忠男はこう言います。「成瀬作品のユーモアというのは非常に身につまされることが多くてね。例えばこれは成瀬さんの演出というよりは原作あるいは脚本の功績かもしれないけれど『稲妻』で浦辺糸子の母親が高峰秀子の娘から『お母さん、これまで幸福だと思ったことあるの』というようなことを質問されると、母親が『幸福なんて、そんなハイカラな』なんて言うんです。これがグッとくるんですね。幸福というのはハイカラな概念があつてね。昔の日本人は幸福なんてことは考えなかったんですよ。まあ幸せくらいはあつたかもしれないけど。われわれは幸福にならなければいけないという強迫観念に襲われている時代であつて、そんなことを考えなかった時代というものをあのくらい何か鮮やかに『幸福なんてそんなハイカラな』というのは実に笑えます。いいセリフですね。日本映画史上の最高のセリフじゃないかしら」と。今回の成瀬巳喜男のことを調べていく中で、この佐藤忠男の発言は、筆者にとって最もグッときた言葉の一つでした。